

## 伊藤左千夫「牛飼が」の歌の問題点

貞光 威

牛飼が歌よむ時に世の中の新しき歌大いにおこる

この歌は、従来、子規に入門して間もない頃に作られたと考えられて、

『増補左千夫歌集』 (岩波文庫 昭和3・7)

『増訂左千夫歌集』 (岩波書店 昭和6・1)

『伊藤左千夫歌集』 (角川文庫 昭和32・6)

『左千夫全集 第一巻 歌集』 (岩波書店 昭和52・1)

『新編左千夫歌集』 (岩波文庫 昭和55・1)

など、歌集のほとんどが、明治三十三年のはじめに置いている。しかし、これは、後に述べる、正岡子規門下で、左千夫と関係のあった岡麓の言葉などをもとに、『増補左千夫歌集』の編者であった斎藤茂吉が、この歌は、左千夫が明治三十三年一月二日に子規のとき

ろに入門して間もない中旬頃の作と推定して、ここに置き、その影響を受けて、それぞれの歌集もそれに従ったままで、この年の一月の作と確定しているわけではない。中には、子規入門よりも前に作られたという説もあり、制作の時期は、まだ不明と言わなければならない。

歌の読み方についていうと、「新しき」は、平福百穂が描いた左千夫像に左千夫自身が自賛歌としてこの歌を万葉仮名で書いたものがある。今、我々はその写真版を斎藤茂吉著『伊藤左千夫』(中央公論社、昭和17・8)の一八〇ページに、色刷で印刷されたものによって見ることが出来る。これには、「阿良当志起」とあるので、アラタシキと万葉時代の古格で読むべきことがわかる。万葉風に読む方が力強い調べにはなるが、新しい時代にふさわしい新しい歌というのに、古めかしい読み方をするのはどんなものかという疑問も残る。

これが、もし「明星」の新詩社の歌人の歌であつたら、アタラシキと今風に読むところであろう。アラタシキと古格で読むところに、万葉集を重視する根岸派の面目、悪くいえば限界があるといえよう。一首は、牛飼を仕事にする一庶民の自分が歌を詠む、そんな時代がやってきた。今こそ、この日本の新時代にふさわしい新しい歌が大いに起こるのだ、の意である。

「牛飼」というと、それまで普通は、牛車の牛を扱う者、子供風の垂れ髪で、狩衣を着、鞭を持った牛飼童を指していたが、この場合はそれではない。また、左千夫の歌とほとんど同じ時代に御歌所寄人をつとめた小出繁は

しづの男が牛ひきかへるうしろかげ見る見る消えて野は暮れに  
けり

という歌を新聞「日本」(明治31・2・7)に載せているが、この場合は、農夫が牛を引いているのであろう。牛を引く農夫を「賤の男」と言っており、明治時代になつても、旧派歌人の意識は昔と変わっていないことが知られる。左千夫の歌には、この小出繁のように牛飼を見下げたり、みずからを卑下したりするような気持ちは見当たらない。

左千夫は、この歌で、乳牛を飼って、牛乳を搾って販売する者、牛乳搾取業者の意味に使っている。

左千夫は明治一八年に千葉県の九十九里浜に近い農村から出てきて、東京や横浜の牧場に四年間、奉公したのち、二二年に独立して牛乳屋を開業した。はじめ三頭だった乳牛を、一〇年後には六頭、晩年には二〇頭に増やしている。

左千夫は歌人であると同時に「野菊の墓」などの小説を書き、「馬酔木」や「アララギ」を主宰したが、そのかたわら、一生の間、今の総武本線の錦糸町駅前のあたり、東京本所茅場町で牛乳搾取業を続けたのであるが、こうした事実から見ると、彼は実業の方面でも相当の才覚の持ち主であつたと考えられる。この歌の「牛飼」というのは、伊藤左千夫自身を指している。

旧派の和歌は公家など上流階級の一部の人々に弄ばれ、風雅の世界、花鳥風月を歌うものでしかなかった。しかし、今やそれまで和歌などに関わりを持たなかった、「牛飼」の一庶民も歌を詠む時が来た。これからいよいよ新時代にふさわしい新しい歌が盛んになるのだ、という心意気、気概が溢れている。

ここで、明治期の「牛飼」、すなわち乳業の事情について考えてみると、幕末の安政三年(一八五六)にアメリカ総領事として下田に着任して、玉泉寺に住むことになったタウンゼントハリスは、

牛乳を手に入れようとしたが、その頃、日本人は乳を搾って飲むことをほとんど知らず、わが国には役牛しかいなかったため、牛乳を入手するのにたいへん苦勞したようである。

ところが、明治維新のあとになると、文明開化の風潮の中で、牛乳を飲むことを、最初は、角が生えるなどといって忌み嫌っていたが、時がたつにつれて飲む者が徐々に増えていく。明治四年（一八七二）に民部卿になった大久保利通は、牧畜を殖産の基本として奨励したし、六年には陸軍一等軍医正の石黒忠憲が『長生法』を発表して、健康の増進に牛乳が有効で、長寿を得るには牛乳を飲むが良いと説いた。

このような社会の動向の中で、政・財界に活躍する人々や、旧藩主で、この新しい事業に加わる人も少なくなかった。明治一〇年ごろには山県有朋、副島種臣、榎本武揚、堀田正則といった人々も搾乳の仕事を始めている。この仕事は、西欧の文物や生活習慣の輸入によって生まれた文明開化と関係の深い、時代の先端を行く職業だったのである。

初句に「牛飼が」と自身の職業を打ち出し、尻上がりに力強く歌い上げてゆく、この歌の調子には、いま述べてきたような、牧畜という時代の脚光を浴びた先端の事業にたずさわる左千夫の軒昂たる意気があふれており、自分こそが新しい歌を興こす原動力になろう

とする使命感に満ちた、新派和歌の出発の宣言の歌となっている。

これまでの、この歌の解釈は、その点について、やや問題があるのではない。最近、書かれた左千夫に関する書物でも、永塚功氏は『伊藤左千夫の研究』（桜楓社 平成3・10）で、

自ら「牛飼」といい、自分のようなしがたない牛飼までが歌を詠むときに、新しい歌が盛んになるのである、といったあたり、庶民的な感覚と自信を匂わせたおらかな気宇が感じられる。

と述べられ、藤岡武雄氏は『生命の叫び 伊藤左千夫』（新典社 昭和58・5）において、

一介の牛飼いにすぎない、名もなき庶民が、歌をよむ時に、新しい時代の歌が興ってくるのだという自負を吐露していて、うたいぶりが大きい。

と述べておられるが、これではいずれも左千夫は自負、自信を持っているとはいえず、むしろ卑下していることになると思われる。左千夫は「自分のようなしがたない牛飼」（永塚氏）とか「一介の牛飼いにすぎない、名もなき庶民」（藤岡氏）とかいうような気持ちとは反対に、先に述べたような、牧畜という時代の脚光を浴びた先端の事業にたずさわる者としての、強い自信を持って「牛飼が」の歌を詠んだと考えるのである。

若いときから元老院、県令、郡長などに建白書を書いて送ってい

る、至って気の強い男であったことも考慮しておく必要がある。

香取秀真の「左千夫君逝く」(「アララギ」大正2・11)によれば、正岡子規はこの歌を、左千夫の銅像を作る時に、それに刻むべき歌はこの歌であると言って褒めたという。確かに、この歌は、左千夫のトレード・マークとするにふさわしい歌で、先に触れたように、平福百穂が描いた左千夫像に左千夫自身が、この歌を自賛歌として書いている。今日、千葉県山武郡成東町殿台の左千夫生家前の歌碑に、この歌が刻まれているのもうなづけよう。

ここで、この歌の制作の時期の問題について改めて吟味してみることにはしたい。

制作の時期について述べたものとしては、同じ子規の門下で、左千夫の友人でもあった岡麓の、『左千夫歌集合評 上』(八重山書店昭和22・6)の中での発言がある。そこで麓は、

この歌は、根岸庵を訪問して間もなく詠まれた歌のやうに記憶してゐます。順序から申しますと次の新年雑詠の方が少なくとも半月位前のものでしたせう。(中略)この歌は作者が先生にお見せした歌でして、この後自他共に「牛飼左千夫」と呼び馴れたのは、この歌があつたからであります。

と述べている。左千夫が子規のもとを訪れ、入門するのは明治三三

年(一九〇〇)一月二日で、これより前、三二年一二月四日の新聞「日本」に「新年雑詠」の課題で、「短歌を募る辞」が載ったのを読んで、これに応募した左千夫の歌が、三三年一月元旦の新聞に掲載された。これを機に、二日に子規庵を訪問して、入門したのであった。この日、岡麓と香取秀真とは子規庵で左千夫に会っている。その麓がこのように言うのをみると、この歌が詠まれたのは明治三三年一月中旬かという気がする。

ところが、香取秀真は、「左千夫君逝く」という文章(「アララギ」大正2・11「伊藤左千夫追悼号」)において、「或時、君と共に根岸庵へ行つた。正岡先生が思ひ出した様に云はれるには、左千夫君の銅像をこしらへてそれに刻みつける君の歌は、この歌であらう、と云はれた」と述べているが、この歌を詠んだ時期や、子規が褒めた時期については触れていない。

同じ「アララギ」の「伊藤左千夫追悼号」に同門の赤木格堂も、「歌飼左千夫」と題する追悼文を書いているが、そこで、彼は次のように述べている。

八月頃に始まつた会の会況を新聞で見居て、次の新年の会には思ひ立つて兼題の雪十首を携へて、始めて子規先生を訪問した。其の時の君の歌は随分幼稚なものでまだ月並の臭が紛々として居た。(中略)それが毎会欠かさずやつて居る間にどんど

ん儕輩を抜いて一種独特の左千夫流の歌で社中を驚かすやうになつた。その頃の歌で、

牛飼が歌よむときに世の中の新しき歌大に興る

というふのがあるが、これは大変先生に誉められ自分でも余程得意らしかった。左千夫君の歌は確かにそれが一紀元を開いたものというてもよい。実際牛飼の君が歌をよみ出してから眠つて居た歌界が妙に色めいて来たのは事実である。

これを読むと、左千夫が「牛飼が」の歌を詠んだのが、そんな入門して半月とか一月とかいった直後のことではなさそうである。子規や、その周りの人々に月並の幼稚さをからかわれ、馬鹿にされていた左千夫が、子規の教えを吸収して、それを身につけて、同人たちを驚かすことは、一月や二月という短時日では不可能と思われるからである。

それと関連して、不思議に思われるのは、子規のもとに入門した後、間もない頃の作で、子規がそれほど褒めた歌だとするならば、当時、子規が選をしていた新聞「日本」の短歌欄に子規はなぜ載せなかったのかということである。当時は、短歌欄はスタートをきったばかりで、歌の不足に悩みこそすれ、多すぎて載せられないというようなことは、けっしてなかったはずである。ところが、この歌が印刷されて公にされたのは子規の没後の明治三八年四月の「新仏

教」においてであって、麓が言っている時期より五年も後であった。根岸短歌会の心意気を示すのに恰好のこの歌を、子規が新聞や雑誌に公表しようとしなかったのが不思議である。

また、左千夫は、子規に褒められたことについては、短歌についても俳句についても、子規の没後に度々書いた回想の中で、ほんのちよつとしたことでも、残すことなく書いていっていると良いほど書いているのに、これだけ有名になっていた「牛飼が」の歌について、なぜ作歌の状況や、どのように褒められたかについて書いていないのか。

香取秀真が、この歌を子規が褒めたことを言い、岡麓がこの歌の作られた時期を、子規のもとに入門した後、間もない頃の作とするならば、それを信じて良いようであるが、この二人は、子規の没後、左千夫と交際しなくなっていたこともあって、左千夫に関する他の記憶も曖昧で、誤りが多いことが気になる。素直に信じることできない場合が多いのである。

それと、もう一つ疑問なのは、入門早々の作としては、あまりに堂々とした万葉調の歌でありすぎる点である。試みに、『左千夫全集 第一巻 歌集』から、入門した明治三三年一月の歌として収める、「牛飼が」の歌以外の歌を全部、抜き出してみると、次の二四首がある。なお、全集には、歌に番号は付けてないが、便宜の上か

ら付けておくことにする。

### 新年雑詠

- ① 葺きかへし藁の檐端の鋏鎌にしめ縄かけて年ほぎにけり
- ② 天近き富士のねに居て新玉の年迎へんとわれ思ひにき
- ③ ゆたゆたと日かげかづらの長かづら柱に掛けて年ほぐわれは

### 雪

- ④ あけの塔ゆゝしなつかし大雪のふれるが中にたてるを見れば
  - ⑤ 青海原きのふの如ししかはあれど安房の遠山雪降りにけり
  - ⑥ 人くるまゆきゝをしげみ都路の大路の雪はくろくぞ降りける
  - ⑦ 寺島や牛島あたり見渡せば墨絵に似たり雪くらくして
  - ⑧ 黒鐵のあづまの橋に吾たてばつくばねおろし雪吹きつくる
  - ⑨ いつはあれど大雪降れる道のへに物こふ人をあはれと思ひき
- 余興の福引に蜜柑と銀杏を得たり

### 茶

- ⑩ 銀杏はいてふの実なり然れども蜜柑のなる木は何といふぞも
- ⑪ いざ子供早茶をたてよ窓の下に釜のとびく湯は立ちぬらし
- ⑫ 面白き山茶花もらひ其花を床にさしいれて茶を立てにけり
- ⑬ 冬の日の暁起きにもらひたる山茶花いけて茶をたてにけり
- ⑭ 宇治の茶を飲めば偲ばゆ宇治の里の茶摘み少女の節よき歌を
- ⑮ 山城の宇治の茶飲めば宇治の里の茶摘み少女の歌し偲ばゆ

- ⑯ 庭を清め座敷を払ひ床の間に掛け物掛けて茶を飲みにけり
- ⑰ いにしへの竹の林に遊びけん人の画掛けて茶を飲みにけり
- ⑱ 飲みをはり僧問ひけらく此茶碗あなな面白何とふ焼きぞ
- ⑲ いにしへの人が焼きけん楽焼の手つくね茶碗色古りにけり
- ⑳ 夜ふけて家に帰れば家人は皆いねにけり冷茶を飲みぬ
- ㉑ 夜ふけて家に帰れば家の内の人皆いねて茶は冷えにけり
- ㉒ 家人の皆眠りにし夜半にわれ厨に行きて冷茶を飲みぬ
- ㉓ 盆栽の松をおきたる窓の内に白髪の翁茶を飲みてあり
- ㉔ 老いらくの老いを楽しむ茶座敷の小窓の上に松の鉢あり

右の二四首のうちで、「牛飼が」に歌に近いとは言えないまでも、関係がありそうな歌を選ぶとすると、次に掲げる③⑤⑧の三首くらいであろう。なお、「茶」と題する⑪から⑲の歌は除外する。

- ③ ゆたゆたと日かげかづらの長かづら柱に掛けて年ほぐわれは
- ⑤ 青海原きのふの如ししかはあれど安房の遠山雪降りにけり
- ⑧ 黒鐵のあづまの橋に吾たてばつくばねおろし雪吹きつくる

まず、③の歌は、のびやかな調子で、下の句が重いという点から「牛飼が」に歌に似ていると認めたのであるが、そうはいっても七

五調であるし、説明的であるから、古典和歌の中では古今集の影響の方が強いともいえそうで、五七調で、万葉調の、歌人でいえば柿本人麻呂の歌を思わせる「牛飼が」の歌とは、違いも大きい。

次に、⑤の歌は、二句切れの五七調で、技巧をあまり凝らさず、叙景を行っているところに、万葉の歌に近いものを認めたのであるが、「青海原きのふの如し」とか「しかはあれど」は、いかにも散文的で、作歌を始めて間もない者の歌という印象を与え、その点で、感情の流露した「牛飼が」の歌とは同列に並べることは難しい作品である。

最後の⑧の歌は、③⑤に比べると、比較的に整った歌で、それほどの難点は見当たらないが、良くまとまっているという程度で、後の左千夫の歌の特徴となった、豊かな叙情といったものは、この歌には見られない。

というような具合で、この時期の左千夫の短歌は、子規のもとに入門したといっても、まだほとんど指導を受けておらず、⑪から⑭の歌が、床の間に活けた山茶花を眺めながらお茶を飲むという風流の世界を歌にしていることが示すように、旧派和歌の世界から抜け出てはいなかったのである。その頃、左千夫の歌は、根岸派の歌人たちにも、特に古風に感じられたようである。根岸派の同人であった赤木格堂は、先にも引用した「アララギ」の「伊藤左千夫追憶号」

の「牛飼左千夫」と題する回想の文章の中に、

次の新年の会には思ひ立つて兼題の雪十首を携へて、始めて子規先生を訪問した。其の時の君の歌は随分幼稚なものでまだ月並の臭が紛々として居た。都の雪は黒く降りけりなんと云ふ歌で子規先生よりさんざ冷やかされたのであった。

と見える。「都の雪は黒く降りけり」というのは、先の⑥の歌を少し誤って覚えていたもので、そのほかに⑩の「銀杏はいてふの実なり」の歌などが、殊に人々の失笑をかったらしい。

子規の家での歌会が始まったのは明治三十一年の三月であったが、その時に集まったのは虚子や碧梧桐など俳人ばかりであった。翌年三月の歌会から歌人が参加するようになったが、つづいて歌会を開くには至らなかった。根岸庵における歌会が定期的に開かれるようになるのは、左千夫の入門後のことで、根岸短歌会の同人の歌の水準も、三三年の一月の時点では、まだこれからという状態であったのである。

以上のような状況や、入門当時の左千夫の歌風などから判断して、「牛飼が」の歌は、子規のもとに入門した一月中旬の作と見ることは相当の困難がある。

ところで、「牛飼が」の歌の制作時期についての考察の中に、左

千夫が明治三三年一月に子規に入門する以前の作とする考えがある。土屋文明氏が『伊藤左千夫』（白玉書房 明治37・7）の中で述べておられるもので、この歌の成立を、明治三〇年ごろと推定しておられる。

この説は、左千夫が当時出席していた歌会の主宰者であった桐の舎桂子が千葉県山武郡成東町殿台の伊藤春園（左千夫）に宛てた明治三〇年七月二一日付の葉書に、

先回の御歌牛飼 天に致し候もの二三人有之、併し惣天は私と相成候

と記されていることに注目して、この文面に見える「牛飼の歌」というのが「牛飼が歌詠む時に」の歌であると推定、明治三〇年七月二一日以前に詠まれたとするものである。桂子からの葉書は、

先回の歌会で作品を会員で互選しましたところ、あなたが提出された、牛飼の歌に、最高位の天地人の天を付けた人が二、三人ありました。しかし、いちばん多く「天」をつけられたのは私の歌でした。

と、選の成績を伝えるものと考えられる。この「先回の御歌牛飼」というのが、今検討している「牛飼が」の歌であろうというのが、土屋文明氏の推定である。

筆者は、「牛飼が」の歌を明治三三年の一月ごろの作と推定する

ことも、左千夫の当時の他の歌の水準とかけ離れて、無理があると判断したのに、土屋文明氏の説は、明治三〇年七月二一日以前に詠まれたとするのであるから、筆者はこの説に懐疑的ならざるを得ない。

ところで、文明氏は、この時期の左千夫が、「牛飼が」の歌のよくな万葉調の歌を詠んだ契機として、明治三〇年ごろから桐の舎桂子の月並歌会へ出席するようになったことを考えておられる。桂子の師匠が橘東世子で、東世子は江戸後期の国学者で、『稜威言別』等を著した橘守部の子の冬照の妻であった。冬照の没後、東世子は息子の道守と椎ヶ本吟社を興して歌塾を開いたが、この塾は、明治初期には佐佐木弘綱の竹柏園、中島歌子の萩の舎に次ぐにぎわいを見せたといわれる。左千夫は東世子の弟子にあたる桂子の歌会に出ていたわけで、ここでは国学者橘守部とのかかわりから、賀茂真淵の歌や万葉集の歌に親しむ機会があったはずだというのが、文明氏の推定である。

確かに桐の舎桂子の師匠は橘東世子で、この人は国学者橘守部とのかかわりがあり、その歌塾で賀茂真淵の歌や万葉集の歌を話題にすることは考えられなくはないから、その可能性は全く否定はできないけれども、なにぶんにも、そのことをはっきり証明する資料がないから、桐の舎桂子の歌会での作とする土屋文明氏の説は、想像



の域を出るものではない。

ちなみに、橋東世子と、その没後は息子の道守が、『明治歌集』を第一編（明治9・1）から第九編（明治32・6）まで刊行しているので、それに収められた作品によって、東世子・道守・桂子の歌というのが、どのような傾向のものか知ることができる。ここで、それを見てみると、

あやにくにうれしきことはうたかたの泡ときえゆく世のならひ  
かな  
東世子

せきいるるさとの小川の水車くるるまでとや早苗とるらん

道守

うぐひすやもよるこびの声すなり皆あら玉の年やほぐらん

桂子

といった具合で、いずれも旧派の作風であって、賀茂真淵の歌や万葉集の歌とは全く無縁といってよさそうである。『明治歌集』の歌会に出ていることが、賀茂真淵や万葉集の歌に親しむきっかけを与え、「牛飼が」の歌は、その影響のもとに桂子の歌会で詠まれたとする考え方には疑いを持たざるを得ない。

筆者は、その歌の制作は、子規のもとに何度も通って、ちょうど長塚節が子規から農村の指導者として立つべきことを諭されたように、左千夫が自分の牛飼という生業を大切にすべきことを諭され、

それがこの歌に実ったと考えたい。

生業を重んじることの尊さについて子規から諭されたらしいことを推察させる歌が子規の『竹の酌歌』の中にある。それは、「悟不悟ノ歌 左千夫ニ贈ル」と題する

茶博士ライヤシキ人ト牛飼ヲタフトキ業ト知ル時花咲ク

をはじめとする七首である。七首の中で、「牛飼」という言葉が歌の中に出てくるのは、この一首だけなので、この歌だけを扱うことにするが、この歌は明治三三年四月二〇日の作である。初出は、子規の没後の四一年二月の「比牟呂」誌上であった。この歌の「茶博士」というのは、先の「茶」一四首に見られるような茶道の趣味をひけらかす左千夫をからかい、茶化して言ったもので、

君は茶道茶道といって、お茶をたてることをさも風流で高尚な  
ことのように考えているようだが、そんな考えを捨ててしまっ  
て、風流とか趣味とかいうものよりも、牛乳をしぼって売る  
「牛飼」の仕事を大切にして、生業に徹することこそが歌を生  
む基礎になると知ったとき、良い歌がどんどんできるよ  
うになるはずだ。

といった意味だと考えられる。歌の題の「悟不悟ノ歌 左千夫ニ贈

ル」とあるのは、子規と左千夫との間に、このような職業や趣味の問題について、禅問答にも似た、丁々発止のやり取りがあったことを窺わせる。

左千夫の「牛飼が」の歌ができたのは、子規からこのような教えを受けるようになってから半年とか一年くらい後のことなのか、それとももっと長い時間をおいた後、例えば子規没後のことであったのか。香取秀真、赤木格堂が共に子規がこの歌を褒めたことを言っているのを見ると、子規の生前の作という気がするが、岡麓の言葉のように、明治三三年一月の作とする説には同調できない。ましてや、三〇年七月二日以前のさくとする土屋文明の説には反対である。過去の思ひ出話というものは信用できないところがあるし、それだけ話題になったという歌が、新聞・雑誌に子規の生前には一度も掲載されていないのも不思議であるから、没後の作とも考えられる。

以上のように、子規の生前のことか、没後のことかは不明であるが、ともかく左千夫の心に、子規から諭された自分の仕事を大切に、その上で作歌に励むようにという教えが熟して、あのような力強い一首となったのだと考えるのである。

〔付記〕

わが国の乳業の歴史については、主として次の文献を参照した。

○窪田喜照著『日本酪農史』（中央公論事業出版 昭和40・10）

○加茂儀一著『日本畜産史 食肉・乳酪篇』（法政大学出版局 昭

和51・4）